

自然栽培コーヒー — Naturally Grown Coffee

自らの足で大地に立ち、未来へつなぐ農業を実践する。
安心して飲んでいただくために。

株式会社クリスタル
代表取締役社長 **木下正義**

「本物のコーヒー」とはどのようなものか？

それは私たちの経営する喫茶店での1人のお客様との出会いだった。そのお客様は、農薬や化学肥料を散布した農産物を口にすると、^{ほっしん}発疹が出たり、咳が止まらなくなったりと体に異変が起こると言う。「本当だろうか？」と疑いをもったが、数日たってもその言葉が頭から離れない。結局、調べてみることにした。化学過敏症の専門医に聞いたところ、推定患者数は国内に1千万人ほどいるという。「化学過敏症の方々にも安心して飲んでいただけるコーヒーを提供したい」。すぐさま農薬や化学肥料に頼らず自然のサイクルで育てられたいわゆる「ジャングルコーヒー」を探し始めた。そして、ウガンダという国を知った。

最も適した楽園 ウガンダ

1997年7月、父と私は東アフリカのウガンダに渡った。「本物のコーヒー豆」の買い付けに来たのだ。

どこまでも続く山並みと、雄大な湖に囲まれた大自然が見渡す限り広がっていた。赤道直下に位置する国で、平地の標高が1000メートル、中央部にナイル河、南部にはビクトリア湖など豊富な水源がある。また、年間平均気温が22℃と快適な気候であることや年間降水量が1100ミリであること。まさに、ウガンダはコーヒー豆にとっての楽園だった」。農薬や化学肥



マウント・エルゴン

料などの薬品に頼らずともコーヒーの木は実をつける。早速、良質なコーヒー豆が育つというウガンダ東部のマウント・エルゴンへ向かう。車を10時間ほど走らせると、標高4321メートルの山の中腹あたり、森の中でバナナやその他の植物とコーヒーの木が共生していた。

当時は、ウガンダ産コーヒー豆の日本への輸出はほぼなかった。「日本に販路を切り開けば、ウガンダの経済発展に貢献できる」と考えた。帰国した私たちは、買い付けたコーヒーの無料試飲のため全国40カ所を行脚した。

その噂を聞きつけたウガンダのジェームス・ババ前駐日大使から連絡が入った。05年3月から開催される愛知万博にウガンダ政府がブースを出すので、そこでそのコーヒーを紹介してくれないかと言う。愛知県は私たちの地元。万博では1日3千杯のコーヒーを用意して無料試飲を行った。このことがきっかけとなり、今



自然栽培コーヒーチェリー

では、年間36トンのコーヒーを全国へお届けできるまでになった。ウガンダで育てられるコーヒー豆は、アラビカ種の原種(古代種)であるティピカ。まさに「本物のコーヒー豆」と言っていいたいだろう。

収益の一部を子どもたちのために

ある産地近くで、ボロボロの服を着た幼い少女と目が合った。3人の兄弟と一緒に、何かを訴えている。私たちは思わず「これで服を買って」と1万円相当のお金を手渡した。その晩、私たちが滞在するホテルにその少女を連れて両親が訪ねてきた。「家族1年分の生活費で娘を買ってもらい、感謝している。どうぞ日本へ連れて帰ってほしい」。私たちは耳を疑った。同国北部に拠点を置く反政府組織が学校を襲い、子どもたちを兵士にしている。虐殺、人身売買は日常茶飯事。数万人の子どもが行方不明になり、内戦で難民は数百万人にも達しているという。その夜、私たちは決意した。「この国を何とかしなければ」、コーヒー豆とは別のもう1つの大きな目標が芽生えた瞬間だった。



生産者家族と

そして、コーヒー豆の収益の一部を使い、元・子ども兵の社会復帰への支援や、スラム街の小学校への支援を行うとともに、契約農園の命をつなぐ診療所を建設することもできた。少しずつではあるが、そこで暮らす人々の生活に貢献することができるようになったと思う。

あのボロ着の少女のことは、今でも忘れたことはない。

未来へつなぐ農業を日本でも

当社は、日本でも1995年から農業へ参入した。ウガンダで行われている自然農法を国内で実践したいと考えたからだ。まずは大垣市上石津町に、国の制度である「農地中間管理機構」を活用して、農地を3町歩、借りることにした。そして、さっそく、3町歩の畑でジャーマンカモミールの栽培をスタートさせた。

農業を始めてすぐに「里山」の現状を知ることになった。上石津町は、この10年で人口1万1400人から5400人にまで減少した典型的な里山地区である。「若者の流出に歯止めをかけなければ」「地域が元気にならなければ」と考えた私たちは、農業を活性化する取り組みを開始した。

農業を始めて5年が経ち、今では東京や名古屋をはじめ全国から毎年100人ほどの方々が農業体験に参加してくれる。農産物についても、少しずつではあるが、飲食店やスーパーなどに流通できるまでになった。

これからも、自らの足で大地に立ち、未来へつなぐ農業、生活につなぐ農業を実践していきたい。

(きのした・まさよし)

中国大連外国語大学留学後、勝原コーヒーに入社。2006年7月に株式会社クリスタルを設立。世界各国の輸入コーヒー豆の製造販売を行っている。